

現代インドネシアの女性における「ヒジャブ化」の追加調査

人間・環境学研究科 修士課程 2年
深谷 拓未
インドネシア
2019年8月8日～2019年8月19日

計画の概要

急速にイスラームが広まる現代インドネシアにおいて、ヒジャブ（イスラーム教徒の女性が頭部に着用するヴェール）着用に至る傾向（以下、ヒジャブ化）について、文化人類学的に考察する。

2018年のジャワ島都市部（ジャカルタ及びバンドゥン）における調査では、ヒジャブ化に際して、女性たちが安価で華美なヒジャブを自由に選択・着用できること、そしてヒジャブ着用は一般化しており、着用契機に困難や衝突を伴わないことが確認された。今回の調査では、イスラームの浸透具合の異なるスマトラ島をフィールドに定めて前回調査と比較検討することで、インドネシアにおけるヒジャブ化の実態と背景をより明確化することを目指すものである。研究手法としては、ヒジャブの形態に関する参与観察、そして、ヒジャブやイスラーム教育に対する女性たちの実践と理解についてのインタビュー調査である。

以上の結果をイスラームの浸透具合の差異を焦点化させて考察することで、ヒジャブ化の進行メカニズムを、制度的・政治的なマクロな視点からだけでなく、個人の実践や意識といったミクロな視点から明確化することができる。

成果

本調査は、西スマトラを主なフィールドとし、参与観察並びに、某私立高校において学生と教員を対象にしたインタビュー調査を実施した。また補足的に、昨年引き続きジャワ島都市部であるジャカルタにおいて、主に国際的な機関や企業に勤める一般女性を対象に参与観察した。

まず、西スマトラ・パダンでの調査結果を、(i) 身体化されたイスラーム、(ii) ヒジャブを取り巻く言説、の二つの観点から述べる。その上で、西スマトラの事例と、ジャワ島都市部の事例を比較検討して考察する。

(i) 身体化されたイスラーム

西スマトラにおいては、イスラームが広く浸透しており、コーランの定める戒律も徹底されている。政治制度や教育制度はさることながら、日常生活における行動や発言に至るまで、人びとの生活はイスラームに根差しているといえることができる。ヒジャブをはじめとするイスラーム戒律について、女子学生らは「意識 (kesadaran)」する、といった表現を多用して語る。例えば、ヒジャブ着用に関するライフストーリーにおいて、ある女子学生 (17 歳) は、「6 歳くらいのときからヒジャブを付け始めたけれど、当初は意識 (kesadaran) がなかった。でも 12 歳くらいのときから次第に慣れてきて、自分の気持ちが芽生え、意識 (kesadaran) できるようになった」と語る。また別の女子学生 (17 歳) は、「まだヒジャブを被ることは自分では意識 (kesadaran) できてない。まだイスラームの勉強中だ。」と語る。そして実際、彼女らのあいさつや仕草といった日常的な振舞いはイスラームの戒律に則っていることは明白であり、インタビューに同行したジャワ島出身のムスリムの女性 (23 歳) は、若い彼女らのイスラーム的な立ち居振る舞いや熱心な発言に驚きを隠せないほどであった。以上のように、彼女らは、ヒジャブ着用などのイスラームの戒律を、自分自身の「意識」として内面化・身体化している、もしくは内面化・身体化することを理想としていると言える。



図 1: インタビュー調査に応じる学生たち
(スマトラ島・パダンの高等学校にて。調査協力者撮影)

(ii) ヒジャブを取り巻く言説

ヒジャブをめぐる諸言説は、彼女らのヒジャブ着用により強い動機を与えている。ヒジャブをめぐる言説として、女性たちの会話の中でよく聞かれるのは、痴漢や性暴力の被害にかんすることや、女性たちに対する男性の目線にかんすることである。加えて、女子学生のヒジャブ着用を校則として制度化している学校の校長も、「我々は発展途上国だから、男性はすぐに性暴力に及んでしまう。ヒジャブがなければ、男性による性被害が後を絶たないだろう」と語る。以上のようなジェンダー、主に男性が想定されて語られる種々の言説によって、ヒジャブ着用は女性を守るための手段として肯定されている。

そして、内面化・身体化したイスラームを基盤とし、諸言説や制度によって肯定されるヒジャブは、腰辺りまで覆う長さが理想とされている。大半の女性が、「ブルゴ (bergo)」という形状が固定され、着用が比較的簡便な形態のヒジャブを着用している。また、柄や派手な装飾は極めて少ないと言える。従って、女性は、見た目には、上半身の大部分が、白・黒・茶といった質素な色のヒジャブによっておおわれた姿となっている。

以上の西スマトラにおけるヒジャブの現状を、ジャワ島都市部におけるそれと比較検討

する。まず、ヒジャブの着用動機については、その理由をコーランやイスラームの戒律に求めること自体は変わりがない。しかし、ジャワ島都市部で見られるような、若者のヒジャブ化が進むにつれて親世代も影響を受けてヒジャブ化するという傾向は、西スマトラには見られない。むしろ西スマトラにおいては、意識（kesadaran）という言葉にあるように、女性たちは自らイスラームの戒律やヒジャブ着用の意味を理解して意識できるようにするという、自発性の存在が確認できる。また、ヒジャブの形態としては、ジャワ島都市部ではファッション性が劣ることなどから、「おしゃれ」とみられていないブルゴが、西スマトラでは一般的である。

それでは、以上のようなヒジャブ化における差異が存在する背景には、どんな要因があるのだろうか。それを検討するにあたっては、インドネシア全域におけるイスラーム化と、同時に進行する国際化の両方を端に置くことはできない。本調査における西スマトラの事例より、厳しい戒律と身体化を伴うイスラームは、ヒジャブの形態や制度に顕在化していることが分かる。その一方で、西スマトラの事例を国際化が進むジャワ島都市部と比較した場合、国際化がヒジャブ化、イスラーム化に対して、どのような影響をもたらすのかという課題が浮き彫りになった。つまり、西スマトラにおけるヒジャブの現状を、イスラーム化の進行に伴うヒジャブ化の増大と捉えるべきか、国際化進行以前のイスラームの形態と捉えるべきか、それとは逆に、ジャワ島都市部におけるヒジャブの現状を、国際化の反映と捉えるべきか、未発達のイスラームにおける特殊事例と捉えるべきか、という問題である。今後、イスラーム化、ヒジャブ化、国際化の間に、どのような相互関係、相補／対立関係にあるのかについて洞察を深め、インドネシアにおけるヒジャブ化について研究を継続していく。